

資料

児童生徒は当事者の語りをどのようにとらえているか

筑波大学医学医療系 徳田 克己

筑波大学医学医療系 水野 智美

I. はじめに

戦争体験者、被爆者、障害者、重い病気の体験者、災害等の被災者、薬物依存経験者、同和地区出身者、北朝鮮拉致被害者などが、児童生徒に対して、学校に出向いて、あるいは遠足や修学旅行先で、自身の経験をもとに講話をすることがある。そのことはマスコミ等でもしばしば取り上げられており、意義が大きな活動として広く認識されている。しかし、それらの講話から児童生徒が具体的に何を学んでおり、またそれらの講話にどのような教育的意義があるのかについて検証した研究はこれまでにない。

教育現場で時々教師が口にする話として「今回来てもらった障害者の話は自分の苦労話ばかりで、あまり教育的ではなかった。でも、子どもが当事者の話を聞いたことには意義がある」というものがある。学校行事等では、事前・事後学習をしっかりと行っているが、当事者の語りに関しては「講話者に丸投げ」の場合が多く、非教育的な話が行われた場合であっても教師が事後指導をすることはほとんどない（徳田，2016）。

また、貴戸（2007）は当事者の語りそのものに「危うさ」があることを指摘しており、さらに「当事者の語り＝真実の語り」であることに疑問を呈している論評もある（福村，2006）。

そこで、小学校から高校の教育の中で当事者の語りがどのように行われているのかについて大学生を対象にした質問紙調査（回想調査）を行った。本稿では、その結果をまとめ

るとともに、当事者の語りを児童生徒の教育に取り入れる際に、教師は何について配慮すべきであるかについて考察する。

II. 方法

1. 調査対象者

関東及び関西の5つの大学に在学している大学生 619 名

2. 調査手続き

上記の大学の教員に依頼し、授業終了後に任意の無記名自記式の質問紙調査を行った。

調査時期は、2017 年 4 月～5 月であった。

3. 質問項目

- ① 回答者の年齢、性別
- ② 戦争体験をした人、障がいのある人、病気の人、特別な体験をした人など「当事者」の方が学校に来て、話をしてくれた経験の有無
- ③ ②の経験の時期、内容
- ④ 当事者の話を聞いて感じたこと。複数あった場合はその中で印象に残っている経験 2 つ。
- ⑤ 話の内容は勉強になったか（5 件法）
- ⑥ 当事者の話に、考え方や価値観の押し付けを感じたか（5 件法）
- ⑦ 当事者の話を聞く前に、学校でそのことに関する勉強をしたか（5 件法）
- ⑧ 戦争体験をした人、障がいのある人、病気の人、特別な体験をした人など「当事者」の方の話を学校の遠足や校外学習、修学旅行で（学校外で）聞いた経験の有無。
- ⑨ ⑧の経験の時期、内容

- ⑩ 当事者の話を聞いて感じたこと。複数あった場合はその中で印象に残っている経験 2 つ。
- ⑪ 話の内容は勉強になったか (5 件法)
- ⑫ 当事者の話に、考え方や価値観の押し付けを感じたか (5 件法)
- ⑬ 当事者の話を聞く前に、学校でそのことに関する勉強をしたか (5 件法)

4. 倫理的配慮

調査は筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て実施した。

質問紙調査の目的や方法を十分に説明した上で、本研究は無記名式質問紙調査であり、研究実施者が回答者を特定することはできないこと、回答・提出しなくても何の不利益もないこと、回答しにくい項目がある場合には回答しなくて良いことを十分に説明した。

Ⅲ. 結果

当事者の語りを学校で聞いた経験があった者は 368 名 (全体 619 名のうちの 60%) であった。表 1 に当事者の属性を示した。調査対象者 1 名につき最大 2 件の回答を求めたが、小・中・高とも戦争体験者、次いで視覚障害者の講話を聴いた経験がある者が多かった。その他については学校別の人数を示していないが、聴覚障害者は小・中学校で多く、薬物依存経験者は小学校では皆無であった。

当事者の話が勉強になったかどうかを尋ねたところ、どの当事者の話も 8 割以上の対象者が勉強になったと回答した。一方、当事者の話の内容に「圧迫・押しつけ」を感じたかについて尋ねたところ、戦争体験者には 22 名 (戦争体験者の話を聞いた者のうちの 20%)、視覚障害者には 7 名 (視覚障害者の話を聞いた者のうちの 12%) がそれらを感じたと回答した。また話を聞く前に学校で事前学習を行った者は 368 名のうち 169 名 (46%) のみであった。

校外学習や修学旅行等で当事者の話を聞いて

た経験を尋ねたところ、619 名のうち 60% (370 名) がその経験があると回答した。戦争体験者の話が最も多く 370 名のうちの 84% であった。その話を 97% が勉強になったと回答したが、同時に 20% が「圧迫・押しつけ」を感じたとも回答していた。また、84% が事前学習を行ったと答えた。

Ⅳ. 考察

語りの当事者として、戦争体験者や障害者だけでなく、薬物依存経験者や北朝鮮拉致被害者など、当事者である話者が多岐にわたっていることが確認できた。

当事者の語りの教育的効果を上げるためには児童生徒の事前学習が必須である (徳田・水野, 2005)。話者がなぜそのような発言をしているのかを理解するためには、歴史的な背景や話者が置かれている立場に関する知識や認識が必要である。

また、教師は話者である当事者と事前に会い、子どもの発達に応じた話の内容や話し方についての十分な打ち合わせを欠かしてはならない。

さらに語りの中に子どもに誤解を生む話があった場合には事後学習において、教員が修

表 1. 当事者の属性 (名)

	小	中	高
戦争体験者	63	26	23
視覚障害者	44	7	6
車いす者	9	5	1
難病者	2	1	5
その他	67	44	57
聴覚障害者			11
薬物依存経験者			10
同和地区出身者			6
交通事故被害者の家族			5
北朝鮮拉致被害者			4
震災被災者 (阪神、東日本、津波)			4
オリンピック出場者			3
戦場カメラマン			3

正すべきである。これらの教育的な配慮を十分に行うことによって始めて、当事者の語りの教育的な意義が最大化されたい。

文献

福村幸子 (2006) 「不登校」運動と＜当事者＞の表現, 立命館大学学生論集, 12, 339-378.

貴戸理恵 (2007) 「当事者の語り」の理論化に向けてー現代日本の若者就労をめぐる議論からー, ソシオロギス, 31, 86-98.

徳田克己 (2016) 不適切な障害理解を生じさせる教育や活動の例, 水野智美編著『障害理解教育』, 図書文化, 10-30.

徳田克己・水野智美編著 (2005) 『障害理解ー心のバリアフリーの理論と実践ー』, 誠信書房.

How Students Perceive the Speech of the Experienced Person

Students often have the opportunities to listen to the story from people who experienced war, atomic bomb exposure, serious illness, natural disaster, substance addiction, abduction by South Korea, or people who are from the assimilation district based on their experience when they visit the school or when students go on a field trip or school trip. This research reports the results of the questionnaire survey (recollection research) subjecting university students and asked how the story of the experience person was done in the education from elementary school to high school. The subject was 619 university students. The results were shown below.

1. There were 368 students (60%) who have listened to the story of experienced person.
2. Many had the experience of listening to people who have experienced the war followed by people with visual impairment in elementary school, junior high school, and high school.
3. Eighty percent of them responded that they learned from the story from all experienced people.
4. Twenty two people felt "pressure and push" from the content of the story told by people who experienced war (20% of the people who heard the story from people who experienced war) and 7 people from the people with visual impairment (12% of the people who heard the story from people with visual impairment).
5. Six percent of people (370 people) had the experience of listening to the story from experienced people at off-campus learning and school trip.
6. The largest number of people had the experience listening to people who experienced war, which was 84% of 370.
7. Among those, 97% said that they learned something but 20% felt "pressure and push" at the same time.